

5-4 (11)

ISS stage I 症例の初診時からの経過と治療

八田善弘、澤田海彦

日本大学血液膠原病内科

【目的、方法】新たな stage 分類として化学療法開始時からの予後を解析した ISS が提唱されている。本研究では比較的予後のよい ISS stage I 症例の初診時からの経過と治療を後方視的に解析し、初診時 ISS stage I 症例の治療方針を検討した。対象は当院を初診した ISS stage I 症例 57 例である。【結果】全症例の観察期間中央値は 43.5 カ月で 50% 生存期間は初診時から 106 カ月、化学療法開始時から 85 カ月であり、ある程度の無治療期間が存在した。ISS stage I のまま化学療法に入った群と stage II に進行してから化学療法に入った群とでは予後に差がなかった。ISS stage I 症例が stage II、III に進行するまでの期間の中央値はそれぞれ、19.5 カ月、24.3 カ月であった。また無治療で経過観察している症例が 15 例あり、その生存率は 100% であった。(観察期間 6.5 - 124.5 カ月)。この群は全て ISS stage I のまま進行せず初診時の Durie - Salmon (D - S) stage は 1 例を除いて I であった。ISS stage I 症例のうち D - S stage I、II、III だった症例の初診時からの 50% 生存期間はそれぞれ 162.5、110、85 カ月であった。【結論】ISS、Durie - Salmon 両者を併用することにより予後予測が可能であり、治療方針の選択に役立つ。両方ともに stage I の症例は極めて予後良好で無治療で長期生存が望める。